
S 4 【立ち直る話】

水瀬愁

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

S 4 【立ち直る話】

【Nコード】

N 7 7 0 9 D

【作者名】

水瀬愁

【あらすじ】

ひとつの夢が途切れた。どちらに進めば良いのかわからなくなつた。でも大丈夫。もうすぐ明かりが灯るから。

私立受験に落ちた。

照明の点いていないこの部屋は妙に寒々しくて、毛布に包まった上で膝を抱える。

あつけない終わりだった。夢を掴むための一步を踏み出せたと思った途端の終結。

恥ずかしい。三者懇談であれだけ語って、親にも大丈夫と言いつづけていたのに、すべては夢見心地だけで、すべては夢のままに終わってしまった。

会わせる顔なんて持ち合わせていなかった。だから、私は独りだった。

視界の少し上方で形作られている、長方形の厚みのない紙。そこに刻まれている四桁の番号は、栄光への道を行かせることは許されども栄光を勝ち取らせることは許されざる<負け犬>の証。

何がいけなかったのだろう。

思うところがたくさんあった。されど確証的とはいえないものばかり。そうして、塵が積もって山になったかと自嘲気味に考えた。

途端、携帯の着信音が耳に届く。

膝に埋めていた顔を上げ、ベッドの上にある携帯が発光しているのを見上げる。同時、すっぽりと被っていた毛布が肩まで落ちた。

でようか。

相手は女友達の誰かだろう。合格不合格を問われるのかと思うと、少し判断を迷う。

しかし、やっぱりでることにして携帯を掴み引き寄せた。

”あ。愛姫。学校休んだって聞いたんだけど、風邪か？”

昭人。

女友達よりももっと聞きたくない声だった。

”昼からは顔出してくると思ってたから、ちょっと心配してる。サ

ボリだったら無駄な心配分の慰謝料もらうからな”

明るい感じな声であるのにイラついてしまう自分が、とても嫌に思える。

ふつふつと煮える黒い感情を押し殺して、声を発する。

「……ごめん。サボっちゃったんだ」

できるだけ軽く言っただつもりだった。けれどそうではなかったよ
うで、電話向こうの雰囲気が一風変わってしまったのを覚った。

”……あ、あはは。そうか。まあ、だるかったんなら仕方ないよな”
ちよつとした間のあとのその言葉に、少し悲しくなる。

昭人は友達以上の、親友とよべる幼馴染だ。

彼は私が私立高校に行くことや、なぜその高校に行きたいのかも
知っている。友達もそうだけど、私を一番よく知っているのは彼だ
ろう。受験前日に笑顔でぶつけあった拳と拳　ぶつけたといつて
もコツンと合わせた程度だから、ケンカってわけではない　を思
い返し、それ以外にももつともつとたくさんあると記憶が訴えてき
ている。

あの頃までの自分が遠く感じた。あの頃までの会話が遙か昔の
もの思えた。いつもどおりの自分と考えて、どんなにがんばってつ
くろうとも無理だなと胸が締め付けられた。

”愛姫。お前、今一人なのか？”

「親がいるんじゃないかな」

”そうじゃなくて……ええと、なんついたらいいんだろ”

髪を掻く音がした。彼はイラつくといつも片手でぼさぼさとして
しまう。駄目な癖だと指摘してもいつも直さなかった。いつもいつ
もそうだったんだ。

ちよつとだけ心が温かくなった。温かいのに痛く感じられた。

思わず顔を顰めそうになったとき、電話向こうがいきなりさわが
しくなった。

”ちよ、まっ、こらっ、邪魔するんじゃないやねえっ。ズボンを舐めにく
るなっ。こらあああああー!!”

とてもさわがしい。

携帯を押し当てていないほうの耳が捉えている外の物音もうるさかった。犬の鳴き声がなにやらけたたましい、不審者でも見つけたのだろうか。

”しっしっ。あっち行け。クロスチョップ！パンチキックパンチキックキックキックパンチパンチ！ハメハメハー！俺はガンダムだあああああ！！”

昭人のアホ面が想像できってしまう台詞の数々。私は吹き出して、思いつきり笑ってしまった。

壊れたダムは容易に修復できず、私は手を口に当てて堪えようとしてもどうにも抑えられず、毛布の上に寝転んでしまっただけからまだ止まらない。

痛くて痛くて仕方が無いお腹を抱え、目じりに溜まる涙は毛布で擦り消し、

ひとしきり笑ったあとに吸い込んだ息は、妙に清々しかった。

緩んだまま締まらない頬は、そのままがいい。私の下敷きになりかけていた携帯を両手でそっと持ち上げ、耳に当てる。

「昭人」

”あ？何？今取り込んでんだけど……って、そうだ。そういう案があつたな。愛姫、お前は天才だぞ！”

わけがわからない。

”あとちよつとでお前ん家の前通るから、中に退避させてくれ！”

「……言葉の意味はわかつたんだけど、さ」

あまりにも情けないというか、なんというか。

”つと。ほら、カーテン開けてみるよ。そろそろ行くぞ！”

「ちよ、ちよつと待ってよ」

慌てて窓の方に駆け寄り、カーテンを横へ押し避ける。

目が眩んだ。

強い陽の光に、じゅわつときた。

その中でも見えた、昭人の姿。

獰猛そうな犬に追われていた。ひええええと叫んでそんな顔の昭人が、私へと向く。

あっと思った。

彼の満面の笑顔に、トクンと何かが鳴ったから。

携帯は耳に押し当てたままで、片手を左胸に添える。

昭人はどこを志望してたかな。

公立だと言っていたような気がして、ほっとした。

なぜ安心したのは、思うのも恥ずかしい。

全力疾走。

「ふう」

坂を上りきり、振り返る。

ここまで続いている桜並木には、ぽつんとひとつの人影が。

この高校では運動部をやらせなくてはならないな、うん。

私はどうしよう。できるかぎり昭人といっしょにいたいから、ち

よっと悩む。

野球部に入らせて、私は専属マネージャになる。

うん、我ながら良い案だ。

「昭人君」

やっと追いついてきた彼に微笑む。

真新しい制服。真新しいカバン。真新しい風景。だけど、変わらないものがみつっつあった。そのみつっつがたまらなく大切に、大事だった。

「……大好きだよ」

道はどこまでも続いていく

S 4 【立ち直る話】

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7709d/>

S 4 【立ち直る話】

2009年6月6日13時18分発行